

## 謀反を企て候

### (一)

天正十年（一五八二）五月十七日、これとうひゅうがのかみみつひで惟任日向守光秀（明智光秀）は織田信長より呼び出しを受けて、安土城へと急いでいた。

光秀は五月十四日より徳川家康の饗応役を命じられ、城下に急遽しつらえた宿舎にて家康に対応していたのである。

この年三月に、長年の宿敵である甲斐の武田家を滅ぼした信長は、同盟者徳川家康に駿河（静岡）の支配を許していた。家康の安土訪問は、信長に対する返礼であった。

「何事であろうか」

と、訝りながら大手道（城門へ続く登り道）に差し掛かった光秀は、額の汗を拭う為に急ぎ足の歩を止めた。心地よい五月の風に慰められていたとはいえ、急ぐ身にはすでに夏を思わせる日差しであった。

光秀は不安であった。この頃、光秀には信長の思案が読めなくなっていた。急激に変化する信長の言動に対応できなくなっていたのである。

「まさか、家康殿の処遇のことではあるまいか？」

武田家が滅亡した今となっては、徳川の存在は織田家の将来に禍根を残す。信長の考えそうなことではないか。

よからぬ妄想に囚われながら、光秀の視線は大手道正面の安土城に向けられていた。百間程も続く石畳の先にそびえる七層の城は、五月の陽光に輝き、光秀を威圧するように見おろしていた。

信長から築城の縄張り（設計）について意見を求められたとき、光秀は五層の絵図を書いた。しかし、信長は気に入らず、光秀に築城を任せることはなかった。

天正四年に取り掛った城郭は、天正七年にはほぼ完成した。琵琶湖に突き出て入り江を見下す安土山全体を造成し、高石垣の上に築いた城を中心に、山腹には近臣の武將の屋敷を、山麓には信長の身辺を守る近習である馬廻衆、小姓衆の住居を配置していた。

華麗ともいえる七層の城は、まさに、堅固に組んだ高石垣の武家屋敷が守りを固めているように見える。安土山全体を城と屋敷で構えた城郭は、城下から見るとはいかにも壮観である。

だが、光秀の城作りの感覚とは違っていた。鉄砲技術とその軍略に長けた光秀の築城技術は守りの城である。安土城は守りに弱いと見た。下から火をかければいかにも弱い。

しかし、信長の発想には守りの意識はないようであった。天下人の城を誰が攻めるといえるのか。天下の政庁は権威を見せるだけでよい、と言っているのである。

今や、光秀の感性は、信長の戦略と悉くすれ違いつつあったのである。

今から十四年前の永禄十一年（一五六八）、足利義昭を奉じて京に上った時の心の昂ぶりは何であったのか。共に天下の安寧を求めて語り、戦って来た月日が、光秀の脳裏に蘇っては消えていった。

光秀の足取りは重かった。これから会わなければならない信長への気遣いを思うと、穏やかな心ではいられなくなるのだった。

## (11)

「光秀、参上つかまつり 仕りました。上様にはご機嫌うるわしく、大慶に存じます」

「挨拶はよい。光秀、ちと相談があつて呼んだのじゃ。急なことだが、本日をもって家康の饗応役を解く。ご苦勞であった。何かと都合はあろうが承知してくれ」

「承知仕りました。されど、なんぞ急なことでも生じましたか」

「そちも知っておろうが、筑前守秀吉（羽柴秀吉）が備中高松で苦戦しておるそう。余に援軍を求めて来ておる」

その頃、秀吉の軍は、城將清水宗治の守る備中高松城を攻めあぐんでいた。城は周りを沼と水田に

囲まれ、城に続く道は狭く、しかも二本しかなかった。一見簡単に落とせそうな平城であったが、遮二無二攻められる城ではなかった。だが、すでに播磨（兵庫）、因幡（鳥取）、備前（岡山）の支配権を失っていた毛利は、織田軍団との決戦は不利と考え、密かに和睦の使者を秀吉に送っていたのである。しかし、それを知らされていない清水宗治は、戦う姿勢を崩さず、秀吉の開城の説得には頑として応じようとはしなかった。

清水宗治は毛利の小早川隆景に属する武将であったが、古くから備中を支配する国人（土着の豪士）のひとりであり、織田と毛利の駆け引きに簡単に従うわけにはいかない、武人としての誇りを持っていたのである。

「秀吉め、二、三度小競り合いをして痛い目にあっておる。今は城の周りを土塁で囲み、水攻めにして余の援軍を待つておるわ」

「謀略戦の得意な筑前守殿らしからぬ攻めにございますな。清水宗治は義に篤い武人である、とか申しますが」

「たわけ！ 時代を読めぬ田舎侍よ！ 小義に固執して大義に生きることを知らぬ。まして、小城に五千人も籠城させるとは、軍人とも思えぬ。自惚れ者め、皆殺しにして後悔させてやるわ」

光秀は戦慄を覚えた。一度火のついた信長の怨念は誰にも消せない。相手の血で洗い流す以外ないのだ。これまでの秀吉ならば、短気な信長を恐れて、いかなる手を使っても清水宗治を説得したであ

ろう。だが、たとえ高松城が開城したとしても、毛利との和睦交渉がうまくいくとは限らない。もしも戦闘にいたれば、さすがに秀吉の軍だけでは戦えない。それ故に、高松城を水攻めにし、双方手出し出来ない状態において信長の来援を待つ。

秀吉には黒田官兵衛という軍師がついている。おそらく彼の策であろう。光秀はそこに危険なおいを嗅ぎ付けたのである。信長が西国まで出張る気になれば、唯一残っている光秀の軍団を、そのまま京都周辺に止め置くことは考えられない。なんといつても、光秀には与力として細川藤孝、筒井順慶らが居り、その兵力は二万以上に達する。さすれば、必ず出兵を命じるであろう。

官兵衛のねらいは、織田政権の中枢から実力第一の光秀を遠ざけ、己の主人である秀吉を中枢に据えるつもりには違いない。

「上様、お願いの儀がございます」

「なんじゃ、申してみよ」

「この度のご出陣、思い止まってはくださりませぬか」

「たわけ！ 今さら中止ができるか。訳を言え、訳を！」

「恐れながら申し上げます。上様が西国へご出陣なさいますならば、この際、征夷大將軍の官位をお受け頂きとう存じます」

「光秀、今さら何を言うか。余は正二位の殿上人（貴族）ぞ。下位の征夷大將軍など無用なことであろう」

「仰せの通りにございます。されど、備後鞆の浦には足利義昭將軍の幕府がございます。さればこそ、勅旨により上様が將軍として出兵なされば、鞆幕府は消滅し、大義を失った西国の領主達は自然に上様に従いましよう」

「であるか。じゃが、そちは何か勘違いをしているのではないか。余はすでに天下人ぞ。天下は朝廷の命によって動いているのではない。余の力で動かしているのであるぞ」

「上様、それでは武家の大義が立ちませぬ。武家は勅旨に従ってこそ、武力の発露を許されるのはございませぬか。大義なく、鞆幕府を倒すことはできません」

「黙れ、光秀！ 大義、大義と言うが、朝廷が武家にしたことは何ぞ。官位を餌にして武家を争わせ、乱世を招いたのは彼らではないか。武力なき者が政事まつりごとを行えば世は乱れる。この道理がわからぬそちではあるまい」

「恐れ入りましたでございます。僭越なる申し様、お許し下さいませ」

確かに過去において、政事を託された武家政権を飛び越えて、天皇の綸旨りんしが乱発されたことが武家政権崩壊の一因であったと言えなくもない。信長はそれを意識している。ゆえに、いずれは天皇の行幸を仰ぎ、この安土にて綸旨を意のままにするつもりではないか。信長は朝廷を越えようとしている。

光秀はそこに危ういものを感じた。この日の本では、驕る武家政権は必ず滅びる。平氏、源氏はいうに及ばず、北条、足利政権に到るまで、滅亡の定めに翻弄ひんろうされているのではないか。

「光秀、公方くぼう（足利義昭）の始末はそちに任せる。生かすも殺すもそのほう次第じゃ」

「承知仕りました」

光秀はただただ、頭を垂れる以外なかったのである。足利幕府最後の將軍、足利義昭はいまだ西国で隠然たる権威を持っていた。

天正元年（一五七三）、武田信玄の上洛軍に呼応するように信長に反旗を揚げ、挙兵したものの信玄は途中で亡くなり、味方する兵力もなく、義昭はあえなくも信長に破れ追放されたのであった。紀州に逃れた義昭は、天正三年、毛利を頼り、輝元を副將軍にして鞆の浦に移り、幕府政庁を再開していた。

「鞆幕府を倒すのに武力はいらぬ。上様が征夷大將軍になりさえすれば自然に消滅する」

だが、光秀の願いはむなしく終わってしまった。しかも、己の手を汚すことになろうとは。

「光秀、ただちに坂本に帰り、出兵に備えよ。余は二十九日に上洛し、数日後には都を立つ。六月二日には上洛し余の閲兵を受けよ」

「承知仕りました。では、これにて……」

気落ちした光秀には、信長の言葉も上の空で、辞去の挨拶さえままならなかったのである。

「殿、お迎えにあがりました」

城を下り、安土城下を貫く並木道に出た所で、娘婿の明智秀満が待ちかまえていた。延々と京まで続く並木道は清掃が行き届き、所々に箒ほうきさえ置かれていた。信長の潔癖性を象徴するような道作りであった。

「待たせたようじゃのう。秀満。じゃが、ゆるりともしておれぬ。先に坂本へ急ぎ、斉藤利三に西国への出兵を伝えてくれ」

「承知！ では、お先にご免」

秀満の巧みな乗馬姿を見送りながら、光秀も又、物憂い気分のままに馬上の人となり、小者を従えて歩み始めた。もう夕刻に近い。どこからか鐘の音が聞えてくる。安土城下には、イエズス会の教会が許されていた。「ミサ」とかいふ祈りの集会の鐘であろう。広々とした美しい並木道と教会の鐘の音。日本のどこにもあり得ない風景は、いかにも信長の好みにも合うものであった。だが、光秀の心には決して快いものには映らなかったのである。

逆らう者への容赦のない信長の殺戮は、死後の世界にこそ、幸福な霊の世界（天国）がある、と説くイエズス会の司祭の話を聞き始めてから、特にひどくなったように光秀には思えてならないの

だった。

仏教では、現世での徳を教える。死後の世界は現世の報いであるとして、殺すことなかれと教える。武人には心苦しいことであろう。それ故に武人は仏に帰依し、仏教徒として徳のある為政者を装った。だが、信長は違った。殺人に対する心の葛藤に迷うことよりも、天下布武を実行する為のよりどころを、司祭達の言葉に求めたように思えてならない。

しかし、信長はキリスト教徒になることはなかった。神に対して跪ひざまづかない限り、殺戮の重みは、いつか信長を押し潰すであろう。いかに冷酷な信長といえども鬼神ではあるまい。人間として限界はあるはずである。

信長が安土城を『天守』ではなく、『天主』としたことは、その現われではなからうか。神も仏も信ぜず、日本古来の武士もののふの道にも心寄せず、唯我独尊を貫く先は、「天下の主は我なり」と誇示する以外あるまい。数千人を殺戮した人間の、己の行為への免罪符は、「我こそは神である」と認めさせる以外ないのである。

光秀の思索の行き着く先は、イエズス会に対する怒りであった。

「権力に擦りより、お前達が讃えた信長による異教徒への仕打ち、今に報復がお前達の身に及ぶであろう。それも又、神の摂理と知るがよい！」

光秀は振り返り、七層の安土城を仰いだ。残照に輝く天主は、信長こそ神であると誇示しているよ

うであった。だが光秀には、夕闇に薄れてゆく天主の姿は闇の彼方に消えてゆく信長の姿に思えてならないのだった。

(四)

坂本城は喧騒に包まれていた。軍議を終え、それぞれの持ち場に散った武将達の、出陣への指示が飛び交う。軍議の席に残ったのは、光秀と家老の斉藤利三、明智秀満の三人であった。

「利三よ、この度の上様のご出陣、お主ならどう見る」

「されば、援軍は筑前守殿の求めによるもの。気に入りませぬ」

安土城で光秀が感じた不安を、利三も又、同じ理由で感じたに違いない。

「毛利は三万余の兵を備中に繰り出しながら、戦う様子はございませぬ。高松城の結果を見ながら、有利な和睦の条件をさぐっておるのでございませぬ」

利三はさすがに備中での戦況を的確に把握していた。駆け引きの道具にされ、五千人ともいう籠城者を抱えた城将、清水宗治のことを思うと、光秀の心は痛んだ。

「上様の着陣前に籠城が解かれなければ、城中五千の人間は皆殺しになりましょう。そうなれば毛利

も後には引けず決戦になります」

「上様はむしろそれを狙っておられる。この際、毛利を滅亡させるつもりであろう。さすれば利三、我等の進軍先はどうなると思うか」

「おそらく、伯耆、出雲、石見から長門、周防を攻めて、毛利を挟み撃ちにし、且つ、九州への道筋をつけることになりましょう」

利三の読みに間違いはあるまい。いずれにしても、もはや、我等に坂本への帰陣はない、と考えるべきであろう。

「黒田官兵衛の策とすれば、おそろしい男ではないか。上様を中国まで引き出せば、乱戦が起きるは必定。まさか、混乱に乗じて上様を殺めるつもりではあるまいな」

「筑前守殿はそこまで考えてはおりませぬ。でき得れば、我が殿と入れ代わりに、中央への復帰をねらっているのをごさる。まさに、殿の進退は極まって居ります。ここは思案のしどころかと存ずる」

「相わかった！なる程、筑前守も焦っておるか。なにせ、近頃の上様は、我等老兵を中央から遠ざけ、一族と若手で固めようとしておるでな。もはや、天下人のすることとは思えぬ。利三、皆に下知いたせ！二十六日には丹波亀山城に集結させよ。わが存念はその場にて伝える」

光秀は無念でならなかった。天正元年、足利義昭を都より追放して以来、信長は、征夷大將軍を受任する機会は度々あった。だが、信長は殿上人の官位は受けても、武家の棟梁に納まろうとはしなかつ

た。早目に將軍に就任しておれば、毛利輝元とて、義昭を受け入れることはなかったであろう。さすれば、天正三年以降の播磨をめぐる毛利との攻防戦も、穏やかなものになっていたのではないか。まして、摂津有岡城主荒木村重、播磨三木城主別所長治など、信長に恭順していた者が、義昭、毛利の誘いに乗り、反旗を翻すこともなかったはず。

「上様は將軍義昭を泳がせておいて、己に敵対する者を炙り出し、抹殺を謀ったのではないか。許せぬ！なにが天下の為ぞ、笑止千万！」

天下布武の大義は、万民の為に乱世を終らせたい、との願いではなかったか。だからこそ、悲惨な戦いにも耐えてきた。

だが、今となつては、織田一族の存続の為の戦いに大義はない。これ以上の殺戮は止めねばならぬ。戦いが、一族の欲望の為に成り下がるならば、これまでの敗者及び殺された者達の無念はどうなるのか。誰かがその恨みをはらさねばならなくなるではないか。

## (五)

軍議の席から、ひとり坂本城の天守に登った光秀は、宵闇に横たわる湖面をいつまでも見続けていた。月の光に、かすかに光る湖は、どこまでも静かであった。岸に寄せる波音ひとつない静けさに光秀の心はひときわ寂寥感に包まれていくのだった。

織田軍団の中にあつて、特に重要な畿内方面軍の司令官として働く光秀が、坂本城に落ち着くことはめつたにないことであつた。転戦につぐ転戦は、還暦を過ぎた光秀にとっては、けつして楽な戦いではない。しかし、この頃のふつと気落ちするような心のむなしさは、あながち、老いの身からのみ生じるものではなかつた

ひととき身を休めに帰る光秀の側には、これまで常に最愛の妻、熙子が寄り添っていた。慈愛に満ちた熙子のほほえみに迎えられるだけで、戦塵で受けたすさんだ心が癒されるのであつた。だが、その妻はもういない。三年前に亡くなり、今は西教寺に眠っている。

光秀は、身を襲う寂寥感を持て余しながら、熙子の面影に語りかけるのであつた。

「熙子よ、笑ってくれ。武人にあるまじき、わが感傷を」

熙子は何も言わない。ただ、いつものように慈愛に満ちた眼差しを光秀に向けるだけであつた。

「わしも老いたの、熙子」

と光秀は自嘲しながらも、湖上遙か北東に位置する安土城の方向を見つめていた。安土城は対岸の山々に遮られて見えない。だが、見えないはずの巨大な存在が、光秀の感傷を嘲笑するように、ひしひしと心に迫り来るのであった。

かすかにまたたく、湖上に揺れる漁り火は、元龜二年（一五七一）九月の比叡山焼き討ちを思い出させる。阿鼻叫喚の修羅場であった。揺れる漁り火は、殺された者の靈魂のごとく見え、光秀の心を苛むのであった。

「わしも同罪であった。殺戮を止めることはできなかった」

焼き討ちはこの坂本にも及んだ。この城の後方、比叡山山麓の高台に見える天台宗西教寺はいうに及ばず、修行僧の宿坊から民家に至るまで、すべて焼き尽くされた。

戦いの後、信長は修羅場を見ることもなく、いち早く岐阜に帰り、後始末は光秀に任せたのである。この時より光秀は信長の家臣になった。足利義昭の奉公衆であった光秀の政治能力を高く評価していた信長は、義昭との間が不仲になるや、光秀を家臣として取り立てたのであった。

信長は光秀に命じて城を築かせ、安土から坂本へ、坂本から比叡山の山中峠を越える、京への最短の道を確認したのである。以来、光秀は坂本の地を拠点として、信長の天下布武の戦いに重要な役割りを果たし、今や、畿内方面軍の司令官であった。又、光秀は、比叡山と坂本の地の復興にも心血を注いだ。

当初、明智一族に向ける村民の憎しみは凄まじいものがあつた。西教寺の復興、村々の建て直しを助けたとはいえ、最後に彼らの心を開かせたのは、熙子の献身的な村民へのいたわりであつた。留守がちな光秀に代つて、どこまでも村民に寄り添い、共に復興事業に尽くした。

生国の美濃を追われた時から、坂本の地に落ち着くまで、流浪人の光秀を支えた妻、しかも、村民に慕われた熙子はもういない。

「熙子、共にこの地で苦勞したの。そなたのおかげでわれらは安住の地を得られた。そなたのいない今、わしはどうしたらよいと思うぞ」

光秀が信長の戦いに従軍できたのも、留守を守る熙子が居たからこそであつた。まして、一日も早い天下安寧の願いを込めた戦いではなかったか。だが、信長は変わった。天下の為というよりは、織田一族の為に将来の禍根を絶つという皆殺しの戦法に変わっていったのである。天下統一の大義も、所詮は織田一族による権力と富の集中にすぎないのではないか。

光秀には、これまでの戦いがむなししいものに思えてしかたがなかった。

「わしは何の為に戦ってきたのだ。ただ人殺しを重ねてきただけなのか」

光秀には光秀なりの信念があつた。民、百姓の上に、複雑に寄生する貴族や寺社、及び領主達の支配を排除し、朝廷の権威に支えられた強力な武家政権によって、地方の領主達の勝手な武力行使を禁止する。その為に戦ってきたつもりであつた。

だが、織田政権の支配とは何ぞ。省みるに、地方の領主と民が、営々として築いて来た土地と富を、ただ独り占めしたにすぎないのではないか。

所詮は武家の支配が続く限り、世に泰平は訪れぬ、ということなのか。還暦を過ぎた光秀にとっては、無惨ともいえる程に武士の誇りを傷付けられることであった。

「熙子、今のままでは、わしはそなたに会えぬ。胸を張ってそなたの側に行くには、信長殿と決着をつける外にはないではないか」

老いた光秀には、もはや、天下を望む野心など欠けらなかつた。ただ、傷付いた武士の誇りを取り戻したい一念と、熙子との思い出の地を離れて果てる気になれない、それだけのことであつた。

「熙子、わしがこの地に留まる為には謀反を企てる以外ないのだ。今なら信長殿は倒せる。じゃが、この先、明智一族が生き延びられるとは限らぬ。それでも許してくれるか、熙子」

熙子は何も言わず、ただ、やさしい眼差しを光秀に向けるだけであつた。

## (六)

天正十年（一五八二）五月二十二日、明智光秀は丹波の亀山城（現京都府亀岡市）に入城した。二十六日までに集結を命じていた諸将が次々に到着し、光秀に参陣の報告を行う。

将兵は一樣に闘志をみなぎらせていた。それもそのはず、天正八年に、長年、信長に敵対してきた浄土真宗石山本願寺（現大阪城本丸の地）の顕如と信長が和睦して以来、光秀の軍団が戦闘に参加することはなかつた。久し振りの参戦に誰もが奮い立っていたのである。

頼もしい将兵の姿に安堵しながらも、光秀の心境は複雑であつた。織田軍団の中で、第一人者である光秀に従い参戦することは、将兵達には幸運が約束されていた。

だが、この度は勝利か敗北かの命運を賭ける戦いであつた。まさに、織田軍団の勝利を信じて集まつた将兵に、その大将、しかも天下人である信長を倒す戦いを強いるのである。果たして、光秀が決意した謀反の企てに彼らが応じるのか、いかに彼らをその気にさせることができるかが勝敗の決め手であつた。

現状の戦力について分析すれば、旗本達は問題になるまい。どこまでも信頼して従うであろう。雑兵達は論外である。彼らは大将が勝とうが負けようが意に介さず、生き抜く為にだけ戦う。彼らにとつては、戦いの途中で獲物を手に入れることができればよいのである。雑兵達の日常は、戦いに参加し

ようがしまいが、生死の間で暮らしていることに変わりはない。むしろ、戦場こそが生き抜く手段となっている、とさえ言える時代であった。

気掛かりは組頭以上の武士達であった。彼らは主に土着の郷士達である。一族郎党を引き連れて参戦する。彼らは実力のある領主に従い、先祖伝来の所領の安堵と戦功による報奨が目的である。今だに下克上の気風は消えてはいない。報奨が約束されるならば、直接の主人ではない信長を攻めることに否やはないはずである。

問題はその後である。光秀の戦いにどこまで従ってくるか。その為には、天下取りを全面に出し、天下掌握後の絶大なる恩賞を餌にする以外あるまい。光秀の不安はこの一点にあったのである。

光秀の直属の将兵はおよそ一万三千。その構成は、近江衆、元幕府奉公衆、丹波衆で、割合はほぼ三割ずつであった。

元亀二年の比叡山焼き討ち後に、光秀の配下に組み入れられた近江衆、元亀四年、足利義昭將軍が追放された後に光秀を頼り、家臣になった旧幕府奉公衆。そして、天正七年、丹波、丹後平定の功績により、信長より任された丹波亀山城と丹波衆。いわば、光秀の戦力は敗軍達の混成部隊ともいえるものであった。

元々光秀は領土を持たない流浪の武士であった。それ故に光秀の戦力の本質は、多くは信長に屈伏した武將達であり、長年光秀に従ってきたといえる武士は少なかった。それは、先祖伝来の領土を媒

介した忠義の士に恵まれていないということでもあった。この事実は光秀にとって大きな弱みであった。だが、光秀が決意した信長への謀反は、思いのほかうまくいくのではないか。彼らには旧主の恨みを背負った者もいるであろう。彼らの復讐心を煽り、獲物を約束することでその気にさせることができる。

信長討ちは成就する。光秀には確信さえあった。信長を倒すことができればよい。後の事は、その時のこと。天下人を倒す、という野望のわりには、将来の事について、あまりにも武將にあるまじき、投げやりな結論であった。そうは思いながらも、知将光秀としては、どう考えても信長を討った後の戦略には、ほころびを感じて仕方がなかったのである。

## (七)

五月二十六日、光秀は信頼できる側近、斉藤利三、藤田伝五、明智次右衛門、明智秀満、溝尾勝兵衛の五名に決意を打ち明けたのである。

「先日約束した通り、わしの存念を伝える。わしは信長を討つ。異存あれば申すがよい」

五人共、誰も驚く者はいなかった。最近の光秀の懊悩の姿を見ている皆にとって、およその結論は

予測していた。

即座に家老の斉藤利三が応じた。

「承知仕った。我等はどこまでも殿と共に参る。存分になさいます。ただこの際、殿が決意なされたご本心をお聞かせ願います。我等の覚悟の決め所に致したく存ずる」

「では話そう。聞いてくれ」

光秀は静かに語り始めた。いささかも昂ぶる様子もなく、又、昨日まで悩み抜いていたことなど露ほども見せることなく、確信に満ちた語り口であった。

「この度の決意は、わしが天下を望んで起こすのではない。今、信長殿を討たねば乱世に逆戻りすると思うからである」

光秀の説明する理由は二つあった。一つは信長が唐入り(当時の中国は明王朝)を計画していること。二つ目は、徳川家康暗殺を企てていることであった。

唐入りとは中国への侵略である。後年、秀吉が進めた朝鮮への侵略そのものであった。秀吉は信長の大陸への進出計画を踏襲したにすぎない。その結果、後世にいかなる不幸をもたらせたかは言うまでもないことである。

「天下統一の仕上げの為、西国への出兵だけならばわしも覚悟はできる。信長殿と共に目指した戦いゆえ。だが、その先、我等老兵を国外へ追いやる目論見は許し難い」

「まことのごとくござるか。唐入りなど思いもよらぬこと。上様は本気で考えておわすのか」

明智次右衛門が、白髪の混じった眉毛の下の目をしょぼつかせながら、不安げに光秀に問うのであった。「まことのごとよ！ 信長殿はその為に博多の商人に渡海用の軍船をあたらせている。それを用意できるのは南蛮国しかあるまい」

当時、まだ日本には大海を渡る兵船の技術も、航海術も育ってはいなかった。おのずと南蛮国に頼る他なかつたのである。信長がイエズス会の司祭達を受け入れているのはこの為であった。遠い国から日本にまでやって来た宣教師達に、最も関心を寄せたのは信長であった。

信長は宗教に関心を持ったのではない。貿易による巨利と航海術である。そして、信長が宣教師から誘発されたことは、海外への侵略的野望である。信長は、宣教師の布教活動の裏に潜む、彼らの母国の国家的野望を見抜いていた。すなわち、軍事力による侵略である。だが、信長は彼らを拒むのではなく受け入れ、全て己の野望の為に利用しようとしたのである。

「それにしても、何故に唐入りでござるか」

次右衛門は、さらに納得がいかな様子で問うのであった。

「それは信長殿の人の使い方によるのじゃ。考えてもみよ。信長殿は能力のある者ならば、百姓でも野盗でもお取り立てになられる。わしもその一人であった。おかげでこれまでになれた。だが、この考えでは際限があるまい」

人は誰でも老いる。能力主義もつまるところ老若の交代になること必定。与える土地にも限度があるろう。

「それ故に我等老兵は追われるわけでごさるか」

次右衛門は気落ちしたようにつぶやくのであった。

「それだけではない。信長殿は天皇を唐に移そうと考えておられる。理由は自分が日本の王となる為、そして、これまで功績のある老臣を唐入りさせる大義名分を作るためなのだ。この考えを植え付けたのも司祭達である」

「なに故にございますか？」

光秀の娘婿、明智秀満が不思議そうに問うのであった。

「彼らの教えには『デウス』という絶対者（神）がおり、そのデウスに許された現世の王を認めるという思想がある。つまり、彼らの布教を許す権力者がその国の王なのだ。この理屈を使えば、この国の天皇を超える方便に使えるであろう」

ひと区切り終えたと見た家老、斉藤利三が次の質問に入った。

「殿にお尋ね申す。殿は徳川殿を討つ計画がある、と申されましたが、この事はどうご思案なされます」  
斉藤利三はきびしい視点を見逃さなかった。実は、光秀が徳川家康の饗応役を仰せつかった時、それとなく信長より、家康を討つ話が出たことを利三は聞いていたのである。

「わしは今まで信長殿の戦略は大概追隨してきた。だが、これだけは断固反対した。おかげでわしは信長殿から足蹴にされたわい」

光秀はその時だけ、一瞬、寂しげな表情を見せたのである。

「天下統一の為の大義と思えばこそ、過酷な攻めも行ってきた。だが、徳川殿の謀殺には大義はない」  
光秀の将来を見る目に狂いはなかった。信長が天下安寧の為の戦いを変質していくなかで、光秀は家臣故に、客観的に将来を見える感性を失ってはいなかったのである。

「天下統一を目前にして、今、徳川殿を討てば諸大名の信を失うであろう。さすれば、今後天下は再び乱れる」

光秀は徳川家康を高く評価していた。信長の同盟者として、あらゆる辛酸をなめながらも、三河の勇士として主体性を失わない彼の能力を、明智一族の頼るべき相手として考えていたのである。

「彼を殺してはならぬ。信長殿は六月二日に家康殿を京都に呼び寄せるであろう。我等も閔兵を理由に京に呼ばれておる。その時、信長殿は命じるに違いない」

「わかり申した。殿の決意、我らに異存はござらん。では、今後の戦略をご説明願います」

斉藤利三の言葉に、皆、決意の程を見せるように頷き、早くもその眼には闘志をみなぎらせていたのである。光秀の心は切なくうずいた。内心では彼らの将来を守りきる確たる戦略を持ち合わせているわけではない。老兵の意地をかけて信長を倒す一念にすぎないのだが。